



OITA MEDICAL CENTER

大分

60号

平成29年春

大分市横田2丁目11番地45号
独立行政法人 大分医療センター
国立病院機構
編集発行 広報誌編集委員会
大分医療センターホームページアドレス
<http://nho-oita.jp/>



城址公園（大分市）にて／撮影：経営企画室長 田辺 俊介

基本理念

OITA MEDICAL CENTER

最新の医療技術・知識の修得に励み
病める人の立場に立ち
人の尊厳・権利を尊重し
「愛の心・手」で
最良の医療サービスを提供します

基本方針

- 一 365日24時間断らない診療を目指します
- 一 大分県地域医療支援病院として、地域へ貢献します
- 一 大分県がん診療連携協力病院として、がん診療の充実に努めます
- 一 垣根を越えた連携によるチーム医療の充実に努めます
- 一 地域に根ざした積極的な広報活動と情報発信に努めます
- 一 安定した医療を提供するため、健全経営を志向します

目次

院長就任挨拶（穴井院長）	2	防災訓練（地震→火災発生→避難）の一コマ	10
退任のご挨拶（室名誉院長）	3	医療安全研修会 ヒヤリハット小劇場 第8弾	
退任のご挨拶	4	正しい情報を正しく伝えるために！！	12
新任のご挨拶	6	看護職員募集活動	13
平成28年度 職員表彰の実施について	8	職員コンサートの開催について	13
初の海外発表		合同送別会	14
N A S W（全米ソーシャルワーカー協会）学会にて	9	編集後記	14

新任

院長就任挨拶



院長 穴井 秀明

この度、平成29年4月1日付けで大分医療センターの院長を拝命致しました。大分医療センターの職員の皆様にご挨拶をさせていただきます。室豊吉前院長同様何卒よろしくお願い致します。

改めて、自己紹介させていただきます。私は大分県玖珠町の出身です。玖珠の冬はとても寒く、夏は暑い盆地型の気候です。特に冬は、九州の北海道と言われるくらい寒い地域です。小学生の頃、国鉄の官舎に住んでいましたが、機関庫の風呂に入りに行った後、帰りにはぬれたタオルが白い棒のように凍っていました。昭和57年九州大学医学部を卒業して、九州大学第二外科に入局しました。以後いろんな病院で研鑽を積みながら、平成7年8月に前身の国立大分病院に赴任してきました。それからは外科医長、外科部長、副院長を経験して、今回、院長を拝命しました。

ダーウィンの進化論で有名なチャールズ・ロバート・ダーウィン(1809～1882年)の名言の一つに「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できる者である。」というのがあります。私は以前、この言葉を何か雑誌で見て大変感動しました。弱肉強食の世界においても、強い者でも、賢い者でも生き残れない、変化しうる者だけが生き残る事ができる。衝撃的なこの言葉の意味することは、生物だけのことではなく、病院組織が将来にわたって生き残ることに当てはまると思います。何かを変えようとする時、必ずと言っていいほど恒常的な生活に慣れている人の中には、抵抗する人がいます。今までも、何度もそういうことを経験しました。変えることで全てがうまくいくとは限りませんが、うまくいったことの方が多くありました。自分の中にも変化する事に抵抗を示す気持ちが無い訳ではありませんが、いざという時は、その気持ちを凌駕しなくてはならないと思っています。

当院は平成21年に大分県地域医療支援病院に承認されました。これには紹介率、逆紹介率、救急車搬入台数などのいくつかの条件があります。平成26年度から救急車搬入台数が年間1000台以上という当院にとってはハードルの高い条件になりました。しかし、皆さんの努力により、平成26年度は1001台、平成27年度は1035台、平成28年度は1181台になりました。年々増加しています。平成29年度は1200台の確保を

目指しますので、よろしくお願い致します。

平成23年には大分県がん診療連携協力病院、災害派遣医療チーム大分DMAT指定病院にもなりました。平成24年には完全な電子カルテシステムを導入しました。今では、すっかり電子カルテにも慣れて、2週間以内の医師の退院サマリー記載率も100%に届くようになりました。このことは、医師事務補助員や診療情報管理士の皆さんの協力もあってのことです。感謝致します。平成25年には日本医療機能評価機構の病院機能評価(Ver.6)の更新も無事終わりました。今度は平成30年に次の病院機能評価更新がひかえていますので、ご協力をお願い致します。平成26年にはDPC対象病院になりました。平成27年4月からは中期目標管理法人へ移行し、非公務員化になりました。これは名ばかりの非公務員化でみなし公務員(法令で公務員に準ずる)ですから、刑法その他の罰則の適用などは公務員と同じ扱いを受けます。また、公経済負担という新しいルールにより、今まで無かった出費が追加されました。公務災害から労働災害になり、その保険金も追加され、年間1億1千万円以上の新たな出費となりました。公経済負担とは、一般的には基礎年金の財源の半分は、税財源で賄うことになっていますが、今回、国立病院機構は診療報酬収入の中から支払うようにと法律で決まりました。赤十字病院や済生会病院などの公的病院群の中で、国立病院機構だけが扱われた負担です。この非公務員化への移行は、ダーウィンの進化論でいうと負の進化だと思います。

そんな厳しい状況の中で、病院の舵取りを任せられました。一人だけの力は大変弱いものです。しかし、小さなベクトルも、同じ方向に向くたくさんのベクトルが集合すれば、巨大な力になります。外来棟建替の早期実現のためにも、今年度の病院目標の経常収支率の100%以上を目指さなくてはなりません。患者さん中心の医療は当然ですが、病院職員は病院のため、病院は職員のためであると信じています。

大分医療センター丸は荒波の大海の航海に入っていますが、船長の舵取りであっち行ったり、こっち行ったりしますので、船酔いをしないでしっかりついてきていただきたいと思います。職員の皆様のご理解とご協力を何卒お願い申し上げます。

退任のご挨拶

名誉院長 室 豊 吉



平成29年3月31日をもって、国立大分病院時代を含めて31年8か月の勤務を終え、退職いたしました。長きにわたり、多くの方々に支えられ、また多くの方々からご厚情をいただきまして、無事退職の日を迎えられたことに、この紙面をお借りしまして、厚く厚く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

永年勤続30年表彰での紙面となるべく重複しないよう、少しだけふり返ってみます。

昭和60年8月に消化器科医長として赴任し、当時熊本大学第3内科からのレジデント2人と計3人で入院患者を受け持ちました（原副院長は外来診療のみでしたので）。その後同内科から常勤医師1名が加わり病棟は計4人体制となりましたが、消化器科は別名肝センターを売りにして遠くは四国からの受診もありましたので、入院患者数が多い時には60～70名で、剖検が1日に3人のこともありました。毎日がとても多忙ではありましたが、臨床医としては充実した日々を過ごしました。平成4年7月には副院長を拝命しましたが、外来診療はもちろん、入院患者の主治医も継続したため、多くの会議などでかなり苦勞もしました。そして、その大変さが限界となった平成11年途中より、副主治医的な立場にさせていただきました。ただし、外来主治医での患者さんが入院した時には、必ず早朝に患者さんのベットサイドへ訪問することを現在まで続けています。

そして平成17年4月には病院長を拝命しました。以後職員には国立病院総合医学会や日本医療マネジメントなど学会への積極的な学会発表を勧めてきました。平成18年9月は日本消化器病学会九州支部第50回市民公開講座を世話人として開催させていただきました。12月にオーダーリングを開始しています。平成19年3月十分な準備をしたつもりでの病院機能評価の初受審では、改善要望事項が多く、認定までに1年近くを要した苦勞を思い出します。そのころの病棟はまだ古く、新病棟（現病棟）建て替え改修工事計画が順調に進み、国立病院機構本部承認寸前の平成20年3月に産婦人科医師引き揚げが決定し、この計画が白紙となったことが、今までで最も苦しい出来事でした。しかし8月からICU稼働、平成21年10月大分県地域医療支援病院認可などもあり、全職員一丸となって頑張った結果、平成22年1月新病棟建て替え工事が始まり、11

月から新病棟が稼働開始したことは、最もうれしい思い出です。平成23年は9月に大分県がん診療連携協力病院の認可があり、11月には日本医療マネジメント学会第10回九州・山口連合大会を会長として主催することができました。参加者も1000名を超え、成功裡に終えることができたのも多くの職員のおかげでした。平成24年は7月にリハビリ・給食・看護師更衣室棟が竣工、12月からは電子カルテが稼働開始しました。平成25年は1月に病院機能評価の更新受審（3月認可）があり、10月は健康フェアを初めて大型商業施設（明野アクロス）で開催し、多くの市民に当院をアピールすることができたと思います（以後毎年継続）。平成26年は1月に作成したAKB48の“恋するフォーチュンクッキー”に乗っての当院のプロモーションビデオを2月にオンエアしたところ、すごい反響だったことは、皆様の記憶にも新しいと思いますが、これも職員が一丸となり、各部門・職場を隈なく紹介し、かつ楽しく表現できたからだと思います。4月からはDPC導入病院となりました。11月は国立病院機構・QC活動奨励表彰の九州グループ最優秀賞を受賞し、横浜にて開催された国立病院総合医学会で全国優秀賞として表彰されました。平成27年は3月に、「がん川柳五・七・五～がん患者の思いを川柳にのせて～」を発刊し評判となりました。10月には前年同様QC活動奨励表彰で2年連続九州グループ最優秀賞を受賞したのち、全国特別優秀賞（メダルで例えれば銀メダル!）を受賞し、札幌で開催された国立病院総合医学会・全員交流会の場での表彰には感動・感激しました。平成28年は2月に当院第2弾となるプロモーションビデオ（PV）を大分県作成のPV“シンフロ”をもじって“診フロ”と命名し作成しました。手前みそになりますが、第1弾同様上出来と思っています！

まだまだ思い出は多々ありますが、紙面の都合で終わりとします。

最後になりますが、外来棟等建替改修整備計画が実施設計同意の寸前までしか進行させることができず、工事入札に至らなかったことが心残りです、かつ申し訳なく思っています。1日も早い計画の完成を心より祈念しています。そして大分医療センターのますますの発展と皆様方のご健勝をも心より祈念しています。長い間、本当にありがとうございました。

退職を迎えて

薬剤部長
村上直幸

これまで31年余り国立病院に薬剤師として勤務して参りました。大学を出て勤務し始めたころ、また主任として勤務したころ、さらに副薬剤科長・薬剤部長として勤務したときでは同じ業務をしながらも考え方、取り組み方が異なることを学びました。退職後は別の立場になり、また考え方・取り組み方が違ってくるのでしょうか。このような経験をして参りましたので、組織というものと同じ業務に対して、様々な考え方をする人々が集まって出来ているのだということが良く分かりました。その中で目的を一つに全員の力を合わせることはとても難しいことです。しかし苦しいとき、

新たな道を開拓する時は、力を合わせる事が最も大切で有効な方法です。大分医療センターは、機能評価受審や電子カルテ導入などいざとなればそれが出来る病院でした。このような病院ですからいつまでも地域の要として活躍出来る病院であり続けることが出来ると思います。5年間でしたが皆様のおかげをもちまして業務を進めることが出来ました。有難うございます。

最後になりましたが今後の皆さまのご健康と夢が実現する事をお祈りいたしております。

退任のご挨拶

企画課長
関辰幸

このたび、ここ大分医療センターを最後に定年退職となりました。皆様には大変お世話になりました。就職以来38年間、長かったようで短くも感じた歳月でした。この間転勤を13回重ね、ここ大分では医療センターになってから4年間。国立大分病院時代に2年と合計6年間にわたり勤務させて頂き、私の勤務期間としては一番長い病院となりました。

思い返せば国立時代の2年間は当時の医事課での勤務でしたので、カルテ庫の中で毎日カルテ等の整理に追われたことが懐かしく思い出されます。今回最後の4年間は主に外来建替工事の準備に携わり、設計の打合せ等慣れない業務でしたが、病院の多くの方々に支えてもらいながら勤めることができました。しかしながら工事についてはこれからが正念場で入札・工事着工と慌ただしくなると思います。気がかりではありますが、今後は病院の外から見守らせて頂きます。

仕事以外で楽しかった思い出は伝統ある大分医療センターゴルフ部に所属させて頂き、室院長をはじめ部員の皆様とはゴルフだけではない繋がりも広がり、飲み会の方でも大変お世話になりました。コンペには6年間ほぼ皆勤賞なみに参加させて頂き良い思い出となりました。

今日、無事に定年を迎えられましたのも支えて頂いた皆様のおかげと深く感謝いたします。本当にありがとうございました。今後は熊本の自宅にもどり第二の人生を楽しみたいと思っています。

最後になりましたが、今後の大分医療センターの益々のご発展を期待しております。本当にお世話になりました。



退職のご挨拶

診療放射線技師長

小柳 公彦

3月末をもって定年退職しました診療放射線技師長の小柳です。

大分医療センターには平成23年4月より6年間勤務しました。

在職期間に一般撮影装置（画像処理システム）、リニアック装置（放射線治療）、心臓カテーテル装置、骨密度測定装置、PACS（放射線画像保存システム）、RI装置（SPECT-CT）等の放射線機器が更新導入され、多くの最新放射線機器が整備されました。整備に際しご尽力頂いた室院長先生を始め医師および姉川事務部長や事務スタッフにお礼申し上げます。

放射線部門では従来から放射線機器の取扱いに際

しては、医療安全、機器管理等に注意を払いながら放射線業務を行ってきました。今後は多くの高度放射線機器が導入整備され、より以上の良質で最良な放射線画像が診療に提供できることから、取扱う診療放射線技師の人材育成が重要と考えています。放射線業務に対し職員の皆様のご理解と協力をお願い致します。

最後に、国立病院、国立病院機構に35年間在職致しました。在職中は多くの先輩、同僚、後輩に支えられ定年退職となります。皆様のご健康とご多幸を祈念致しまして退職の挨拶と致します。長い間ありがとうございました。

退職のご挨拶

業務班長

内田 信也

私の社会人生活は、昭和55年に当時の国立小倉病院から始まり、その後、大分医療センターまでに11回の転勤を繰り返しました。

あっという間の37年間で一番印象に残ったのは、平成16年に国から独立行政法人に代わった時。そこには、仕事の変化の大きさに戸惑う自分の姿がありました。

その内の11年余りを大分県で暮らし、そこで温泉と出会い、60歳間近の昨夏には山と出会い、これからの人生で妻と一緒に楽しめる二つの趣味を見つけるこ

とが出来ました。

よく「今後の予定は？」と問われますが、4月2日は別府の温泉まつり、翌週9日も別府の鶴見岳一気登山…と趣味の予定だけは埋まっています。大好きな大分県には、山に温泉にと足繁く通うことになりそうです。

なんとか定年を迎えることができたのも、これまでに出会った多くの方々のご指導、ご協力、ご支援の賜物と心より感謝しております。本当にありがとうございました。

定年退職を迎えて

調理師長

釘宮 正弘

このたび、3月31日付をもって定年退職を迎えました栄養管理室の釘宮です。36年間、大変お世話になりました。食の安全を第一に安心して食べられる食事を提供して参りました。そして医療の一環としての病院給食に誇りを持って取り組んで参りました。お陰様で大過なく今日を迎えることが出来ました。

色々な事がありました。その都度皆様に助けられ何とか乗り越える事が出来ました。

これからは、病院給食も新たな局面を迎える事になりますが、今の食事を維持してもらい患者様により良い食事を提供してもらいたいと思います。私はこれから自分の人生に程良くスパイスをかけながら色々な事にチャレンジしていきたいと思います。最後になりましたが、皆様のご健勝とご多幸をお祈りしながら私の挨拶と致します。

新任のご挨拶



副院長
奈須 伸吉

裏庭にある桃の花がいっせいに膨らみ始めました。みなさま、ご健勝に過ごされていますでしょうか。

さてこの度私は、独立行政法人国立病院機構大分医療センターの副院長職を拝命いたしました。

私は、大分県庄内町生まれ大分市育ちです。1986年に大分医科大学医学部を卒業し、大分医療センターに2度目に赴任した2000年より泌尿器科医長、そして同部長を務めてきました。当院勤務は通算19年目になります。前職、統括診療部長の5年間、室豊吉院長、穴井秀明副院長の背中を見ながら働いて参りましたが、今後は穴井新院長を直接お支えしてゆく立場になりました。

当院は、大分県東部地区にある病床300の地域の中核病院です。職員は400人弱なのでみな顔をよく見知っており、一致団結しやすいという特長があります。

私は、職員のみなさまを大切に思っています。みなさまが伸び伸びと能力を発揮でき、みな合わせて大きな力になるように、極力働きやすい環境を作ることが私たちの大きな役目の一つであると思っています。も

ちろん、みなさまはプロフェッショナルですから、切磋琢磨して、良質かつ安全な医療を提供できるように努力し、共通の目標に向かって進まなくてはなりません。その目標を達成するために、私はみなさまを信頼し、みなさまの知恵をお借りしながら多くの事を学んでゆきます。

また、当院が真に地域に根付いた病院であり続けられるように、医師会および連携病院や医療施設とますます密接に連携してゆくつもりです。

この様に、私は、病院経営、医療安全、病診連携等々の副院長職務に主体を置くこととなりますが、専門である泌尿器科の外来・入院診療や手術も継続いたします。

不幸にも病に侵された方々や地域住民のみなさまのため、病院職員のみなさまのために誠心誠意尽くしてゆきますので、当院の理念の「愛の心・手」をこつこつ実践し、この困難な時代をみなで乗り切りましょう。みなさま何卒ご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

新任のご挨拶



統括診療部長
中村 雄介

本年4月より、大分医療センター統括診療部長を拝命することになりました。これまで、外来棟の一番奥、建て増しのMRI室の窓のない部屋で、ひっそり、淡々と仕事をしておりました。病棟を持たず、廊下もあまり歩かず、影の様な存在です。一度、私服姿で病棟を訪れた際に「あの人誰？」的な、ひそひそ話されたのを覚えています。健康診断結果の署名欄には、名前は記載されているはずなのですが…。今後は、会議の回数に比例し、日照時間と歩数計のカウント、そして皆さんとすれ違う回数は増えることと思います。

この役を拝するにあたり、3つの目標を考えました。良質な医療を行う上で重要なのは「チーム医療」だと考えています。診療科内はもとより、各診療科を超え、さらに院外からもスタッフを招き、多彩な職種で、患者様への「気づき」・サービス提供・評価・修正のサイクルを回転させることが「チーム医療」をさらに質の高いものに向上させていきます。とはいえ、単にチー

ムやスタッフの数を増やしていくだけではなく、効果が目に見えるように運用されるしくみこそが大切だと考え、横糸の一本に加われればと思っています。

次に、2025年の医療提供体制の再編成に向けて、各医療施設が動き出すのが、ここ数年といわれています。この流れの中で、大分医療センターが変化するとすれば、どのような変化が地域の医療や介護ニーズを満たすことが出来るのかを、ダイナミックに評価していかなければならない時期になります。室前院長からバトンを受けた穴井院長、奈須副院長の指導の下に、地域のためにできることを探り、実践していく一助になり得ればと思っています。

最後に、院内環境において、活気に溢れ、絶えず元気が湧いて出るように、広く窓を開き、淀みをすすぐような風通しの良い病院を目指したいと思います。今後とも、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

新任のご挨拶



看護部長
佐保 美恵子

4月1日付で、西別府病院より配置換えで参りました佐保と申します。平成4年の4月に大分病院から看護教員に昇任し、26年ぶりに大分医療センターに戻ることが出来ました。どうぞ宜しくお願いいたします。

職員の皆さまの中には、その当時一緒に勤務した方々や看護師長や副看護師長として活躍されている卒業生も多く、大変懐かしい思いと成長された姿に喜びを感じながら毎日勤務させていただいております。これからも職員の皆さまとの触れ合いを大切にしていきたいと思っております。

また、病院の理念である「病める人の立場に立ち、人の尊厳・権利を尊重し、『愛の心・手で』、最良の医

療を提供する」ためには、病院内だけでなく在宅での生活も見据えたチーム医療が求められていると思っております。そこで『愛の心・手』でもって、その人の生活や人生、命、つまり人としてのサポートができるスタッフの育成を目指して、地域とのコミュニケーションを取りながら、サービスの向上に努めていきたいと思っております。

もとより微力ではございますが、これまでの臨床や教育現場での経験から学びえたことをもとに、また皆さま方のご支援をいただきながら役割を果たして参りますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

新任のご挨拶



薬剤部長
吉野 裕統

今年から大分医療センターでお世話になります。薬剤部長の吉野です。大分には、20年ほど前に別府に勤務して以来となります。その頃は、海に山にと活動的でしたが、すっかり俊敏さをなくし、体型も変わり、ゆったりと過ごすことに心地よさを覚えるようになりました。

大分県は県境には雄大な山々が聳えています。昔を思い出し、少し足を踏み入れてみようかと、ほんのかすかに頭をよぎります。

薬剤部では本年1月から「病棟薬剤業務」を開始

いたしました。いつも病棟にいて、患者さんやスタッフの皆さんから顔が見える身近な薬剤師を目指しています。始まったばかりのこの業務を確立させ、発展させることを第一目標としたいと思います。

仕事を離れると、大分県の全国的にも著名な魚たちが私に寄り添ってきます。こちらはじっくりとお相手をしようと、改めて決意しました。

今後ともよろしくお祈りいたします。

新任のご挨拶



企画課長
大城 英作

4月1日の異動により参りました、企画課長の大城です。大分医療センターには、ご縁があり、この度、2度目の勤務をさせて頂くことになりました。

2度目の勤務ということから、病院長を始め、多数の顔見知りの職員が居ることは、転勤族の私にとって何より心強いものです。これから、病院内の至る所で会うと思っておりますが、その際は、気軽に声を掛けて頂ければ、と思っております。”勇氣100倍です。”

話は変わりますが、昨今の医療環境、とりわけ病院

経営が非常に厳しい状況の中、また、当院が重要な局面を向かえる中において、企画課長という重責を担うことに、多少のプレッシャーを感じておりますが、そのプレッシャーを活力（推進力）にし、この難局を皆さんと一緒に乗り越えられるよう、微力ではありますが、尽力していきたいと思っております。皆様のご協力よろしくお祈りいたします。最後にこの誌面をお借りし大変恐縮ですが、より一層の経費削減、併せてよろしくお祈りいたします。

平成28年度 職員表彰の実施について

庶務班長 岡部 達枝

職員表彰ノミネートチーム及び受賞結果

No.	部門	表彰対象	発表者	発表内容	賞
1	看護部	看護部ジェネラリスト QC	渡邊看護師	救急外来の処置入力漏れを減少させたい	優秀賞
2	医療安全	医療安全推進部会	二宮看護師	1階病棟術前中止薬の取り組みについて	
3	看護部	5階病棟	姫野看護師長	5階病棟の標語を取り入れた取り組みについて	最優秀賞
4	医療安全	医療安全推進部会	大久保副薬剤部長	医薬品に関する医療安全向上の取り組みについて	優秀賞
5	看護部	看護部ジェネラリスト QC	志村看護師	4階病棟ベッド周囲の環境改善	
6	医療安全	医療安全推進部会	大原看護師	2階病棟看護師管理薬の取り組みについて	

研修参加推進ポイント表彰者

No.	部門	氏名	ポイント数
1	医師	的野 る美	29
2		三木 大輔	23
3		梅田 健二	19
4	コメディカル	佐藤 香	45
5		石川 喜久	38
6		竹下 和美	35
7		花木 祐介	35
8	看護	小林美紗稀	22
9		遠藤 優希	21
10		冨田 美奈	20
11		池田 佳織	20
12		奥苑 有希	20
13	事務等	頼藤 博士	27
14		安東 直人	19
15		釘宮美由紀	16

毎年恒例の職員表彰を平成29年3月13日（月）に大会議室で行いました。

職員表彰とは、前回開催からの1年間に各職場、各チームで行ってきたQC活動等を発表し、その貢献度を審査員（院長・副院長・事務部長・看護部長）が審査し、表彰するものです。

また、研修参加推進ポイント表彰とは、自己研鑽やレベルアップのため、自主的に参加した研修の数が多かった人の中から上位の人を表彰するものです。

今回は例年に比べ発表者が少なくはありましたが、日常業務で忙しい中にも関わらず、その努力には頭が下がる思いです。

29年度は新たにポイントカードも作成し、引き続き実施しますので、多くの方に参加していただき当院を盛り上げていきましょう。

初の
海外発表

NASW (全米ソーシャルワーカー協会) 学会にて

『Mental health care through Senryu , a Japanese form of short poetry
～ Deployed from the micro, mezzo, macro levels of social work ～』

医療社会事業専門職 岡江晃児

2017年1月26・27日にアメリカのハワイで開催されましたNASW（全米ソーシャルワーカー協会）ハワイ支部の学会にて学会発表しました。人生初の海外発表で『Mental health care through Senryu , a Japanese form of short poetry ～ Deployed from the micro, mezzo, macro levels of social work ～』という題目でがん川柳について英語で約50分程度の発表をしましたが、初めて学会発表した時のように英語での発表は緊張しました。無事発表が終わりアメリカのソーシャルワーカーから多くの質問や意見をもらい、海外のソーシャルワーカーから強い関心と理解を得られたことは自分にとって非常に意義深いものとなり忘れることのない日となりました。これからも積極的にグローバルな視点とローカルな視点を大切に日々の実践を精進していきたいと思えます。



防災訓練 (地震→火災発生→避難) の一コマ



地震発生中！



通電火災の発生！！



被害状況の確認

今回は屋上へも避難



重症者を階下の病棟へ搬送中

高さ14m！？



こちらは高さ20m超





第4回防災訓練（地震による火災発生時の避難訓練）

副看護部長 竹之内 須賀子

3月10日に4回目となる防災訓練を実施しました。今回は、日向灘北部を震源とするM7.2の活断層地震（津波なし）が発生、大分は震度5弱の想定で行いました。地震と火災の2段階の訓練であり、消防隊も参加した大がかりなものになりました。梯子車や救助袋を使っての実際の避難行動ができ、救助袋では靴を履いたままでの降下は難しいことや思いの外、時間がかかること等が

わかりました。訓練をする度に、報告連絡体制や患者移送に伴う物品の不足、マンパワーの問題などが浮き彫りになりますが、訓練と言う経験を重ねながら有事の際には対応できる知識・能力は徐々に培ってきていることも実感しています。次は、9月に防災訓練が行われます。多くの皆様の参加とご協力を引き続きお願いいたします。

防災訓練に参加して

4階病棟看護師 牧 京子

今回の訓練は、4階病棟の食堂が出火元という設定で、私は状況把握を行い「二次災害ありません」と本部に伝えるリーダーの役割でした。大きな声で落ち着いてハッキリ言う事だけを考えていました。声は、普段より大きいので、大丈夫ですが、年齢のせい最近よく言葉をかむので、ハッキリ正確に伝えられるか心配でしたが、何とかクリアしました。

次は、担送・護送患者を安全な場所に誘導する患者移送の役割です。

担架がすぐにこなかったり、人が足りなくかなり時間がかかりました。訓練で、色々シミュレーションしていても、人がたくさん集まると、スムーズにいかない事も多く、問題や課題の多さを実感しました。しかしこのような訓練をすることで、自分の中に色々な面で災害が起きた時、パニックにならず、対応できると思えました。

災害は、昼夜問わずに訪れます。訓練により、各自の意識付けする事が大切だと感じます。皆様、訓練お疲れ様でした。



今回のヒヤリハット小劇場では、正しい情報を正しく伝えるためにどのような確認作業が必要かを参加者と一緒に、「CT検査の前処置の指示が正しく伝わらなかった事例」と「患者間違い事例」の2事例を演じて討議しました。「わかっているだろう」はなく、「わかってもらおう」と発信者が、伝言をうける人の立場になって情報発信することが大切だと感じた。正しい情報を得るための確認作業は、基本的なルールを遵守することが重要など、今回も前向きな意見がありました。

ヒヤリハット小劇場は、参加者も演者も実際の場面をイメージでき、楽しく具体的な対策検討できることから、事例の提供が多く企画者としてはうれしい悲鳴を上げているところです！



医療安全推進部会では、患者様にも協力いただけるようにポスターを作成し、患者誤認防止に努めています。

看護部では、平成30年度採用 看護職員募集活動に取り組んでいます

3/1 大分県立看護科学大学主催

県内就職説明会

大分県立看護科学大学卒業生3名と就職説明会に参加しました。今年度のブース来場者は30名と例年に比べて多くの学生さんたちが話を聞きに来てくれました。



3/4 国立病院機構九州グループ主催

看護職員就職説明会

九州グループ28病院が集結して行われるこの説明会に当院も参加して参りました。少しずつブースの装飾もversion upしていき、当院の魅力をアピールする良い機会になっています。今年度のブース来場者は46名でした。



3/16 インターンシップ開催

当院への就職を考えている学生18名がインターンシップに参加してくれました。当日は看護師と一緒に患者さんへ看護ケアを提供したり、ベッドやストレッチャーを使用しての患者体験を行ったりしました。1日看護師と行動を共にすることで当院を知ってもらう良い機会となりました。



職員コンサートの開催について

管理課長

三宅修二

恒例の春夏秋冬(年4回)の院内コンサートとは別に、平成29年3月6日(月)に職員コンサートを開催しました。

今回3月末をもって退職となる室院長先生のさよならコンサートという企画を盛り上げるため、呼吸器内科部長の一宮先生と1階病棟看護師 遠藤副看護師長にもピアノ演奏での賛同いただき、3名による華やかなコンサートとなりました。

アンコールでは室院長先生の“君の朝”の生声を披露していただきましたが、マイクの不調で後方の患者様にはご迷惑をお掛けしました。

しかしながら、多くの患者様にご参加いただき、大変有意義なひとときとなりました。

室院長先生には、4月以降も週1回は外来診療援助に来ていただけることになっています。引き続き院内コンサートへの参加もお願いしていきたいと思いますので、皆さんも楽しみにお待ちいただけたらと思います。



合同送別会 (皆さんお世話になりました)

給与係長
米丸 淳一

平成 29 年 3 月 16 日 (木)、トキハ会館にて盛大に合同送別会が開催されました。

今回は定年等退職者 6 名とその他辞職・転出者等 40 名の合計 46 名の方々が当院を去られることになり、そのうち 28 名の方にご出席いただきました。

お送りする側の職員も 98 名もの参加があり、短い時間ではありましたが、苦楽を共にした方々との懐かしい思い出に浸りながらのひとときを共有することが出来ました。

これからのそれぞれの第二の人生や新しい職場での益々のご活躍を職員一同、お祈り致しております。皆さんのお力添えが無くなることは本当に残念ですが、気持ちも新たに精進して参りますので、これからも、そしていつまでも大分医療センターのことを宜しく願います。



大分医療センターのロゴマークについて

全体のコンセプト



Oita National Hospital (旧国立大分病院)の頭文字をロゴマークの形であらわしており、さらに「O」は病院の所在地である「大分市」及び「大在」の地名を示している。

これを、海・空・太陽・緑の大地を立体的に示す色合いで表現したものである。

- 「緑と赤」…昇る朝日と緑豊かな大分の地を表す。
- 「青」……大分医療センターのシンボルカラーを示し、私達医療従事者を表す。
- 「黒」……地域と大分医療センターを結ぶ架け橋を表す。

編集後記

新年度を迎え、編集委員にも新メンバーを迎え心機一転です。今回で広報誌「大分」も平成13年4月の創刊号から数えて17年目の60号を発刊するに至りました。創刊当時に編集委員長だった室豊吉先生(当時は副院長)も退職となられて、色んな意味で広報誌「大分」の歴史の重みを感じています。

とはいえ、穴井新院長の言葉にもあるように、「新生」大分医療センターを目指し、広報誌「大分」も大きく新しく生まれ変わるよう編集委員一同頑張っていきますので、職員皆さんの記事の投稿も宜しく願います。m(_ _)m

「大分」は職員の、職員による、職員のための広報誌です!

編集委員一同

編集委員

委員長

奈須 伸吉 (副院長)

委員

- 姉川 俊也 (事務部長)
- 高祖 英典 (副医局長)
- 竹之内須賀子 (副看護部長)
- 山本真由美 (教育担当部長)
- 高瀬 由香 (2階病棟副看護師長)
- 三宅 修二 (管理課長)
- 田辺 俊介 (経営企画室長)
- 生野 充章 (業務班長)
- 鶴崎 裕介 (専門職)
- 米丸 淳一 (給与係長)
- 岡江 晃児 (医療社会事業専門職)